

平成25年度学校評価報告書(自己評価)

<p>本年度の重点目標</p> <p>○〔重点目標1〕 心の育ちの推進を図る教育を充実する。</p> <p>○〔重点目標2〕 基本的生活習慣、学習習慣を定着させる。</p> <p>○〔重点目標3〕 健やかな体を育成する。</p>	
--	--

	a:評価項目 (取組の内容、目標達成のための手だて)	b:取組の状況 (データや資料等を活用して説明)	c: 評価	d:成果及び改善方策
重点目標1	道徳の時間が子どもの心に響く時間になるように、指導の充実を図る。手だて:授業研究の実施。主題研究(国語科)指導案に道徳の時間との関連を盛り込む。	授業研究は、道徳主任が北九州市小・中学校道徳教育課程サークル(10月18日実施)で授業公開する他、若年研究でも実施。授業づくりの過程、協議会での振り返りで、充実した。国語科の指導案づくりも全学年実施し	A	【成果】授業づくりの過程で「模擬授業」を重ねたことは、授業者にとっても他教員にとっても意義深かった。また、授業研究時だけでなく、それぞれの担任の会心の板書ができた場合、デジタルカメラに記録しておいて、紹介し合った。とても有効であった。 【改善方策】国語科だけでなく、他教科等との関連を意識することが必要。
	確かな人権感覚を育み、人権意識の高揚を図る人権教育を推進する。手だて:いじめ問題解決に児童に主体的にかかわらせる。職員研修の実施。	「いじめ防止サミット」に向けての企画委員会の取組は、様々な形で継続実施した。校内でポスターを作成したり企画委員が紙芝居を作成して啓発したりした。サミットの様子を全校児童の前で参加児童が報告。その後も放送	B	【成果】児童の立場から「いじめ防止」に対して取り組むように支援したことは、企画委員の児童にとっても他の児童にとっても親近感及び緊張感があり、「いじめ防止」に主体的にかかわることができた。 【改善方策】児童が主体的にかかわっていくことができる取組を意図的、継続的に行う必要がある。携帯電話による「いじめ防止」について特化した指
	「一人一人を大切にすること」という信念のもと、特別支援教育の充実を図る。手だて:職員研修の実施。特別支援教育相談センターとの連携	指導主事を要請して、研修を実施したり個別に指導したりして、児童の教育的ニーズに応じる指導・支援の在り方を研修した。特別支援教育相談センターとは、様々なかわり方で、常に指導・支援いただいた。	B	【成果】指導主事に具体的事例を挙げただきながら、一斉に対する指導。個に対する支援を教えていただき、実践の方向性が明らかになった。 【改善方策】児童に対する指導や支援のため、複数の教員が必要であるが、今の教職員数で対応できるよう、研修を重ねることが必要。
重点目標2	「穴生小学校6つの花」を咲かせていくことを徹底する。安全・元気(健康)・仲よし(仲間)・がんばり(学習意欲)・そうじ 手だて:6つの花を教室等に掲示、話題にしたり声かけしたりする。	「あいさつ」については、各学級で「あいさつの花」の掲示物を作成し、児童の自己評価等を張り出していった、児童が意識して「あいさつ」に取り組むことができるよう、さらに、朝の会、帰りの会で担任による声掛けを継続し	B	【成果】「あいさつ」については地域の方から「大きな声でよくあいさつしている。」とのコメントをいただいている。児童も「あいさつ」に対する意識を高めている。 【改善方策】高学年より低学年児童の方が、しっかりあいさつしているのが現状である。高学年児童に「あいさつのお手本」ができるよう、高学年児童
	学校は「集団で学ぶ」場であることを子ども・保護者に理解させ、そのためのルールを確立する。手だて:学習規律の徹底。学習用具への指導。整理整頓。	小中一貫・連携教育での4校合同研修においても、中学校の意見を聞くなどして、徹底した。児童だけでなく、保護者に対して、学校だより、入学式、PTA総会、PTA理事会等で啓発を続けた。	B	【成果】学習規律はかなり徹底した。「集団で学ぶ」ために、用具を忘れない、ルールを守るだけでなく、交流の在り方についても経験で習得できている。 【改善方策】学年が上がるに連れて、ルールの遵守より個性の表出を児童が言い出す。小中連携で取り組む。
	「言葉の力」の育成に向けて、国語科だけではなくすべての教科等において、言語活動を充実させる。手だて:振り返り活動の習慣化(話す・聞く・書く・読む)	主題研究のテーマを国語科「書くこと」領域にしたこともあり、「書くこと」について文種等意識させながら取り組んだ。他教科等においても、終わりの5分間に振り返りを行わせ、そこで、発言させたり書かせたりした。	B	【成果】「終わり」5分間に振り返りを行うことが定着してきた。自己評価だけでなく、友達のよいところ等も発言させたり書かせたりしている。このことが学習意欲の向上にもつながっている。 【改善方策】めあて→まとめに結び付く「振り返り」になるようにしていく。

重点 目標 3	健康で安全な活力ある生活を送るための基礎を培う「健康教育」を推進する。手だて：養護教諭との連携。遅刻をしないように指導・支援したり保護者への啓発を行う。	養護教諭が来室した児童に個別に「心身の健康」について話すだけでなく、保健だよりや保健室の掲示板を活用して「心と体の健康」を児童に考えさせた。学校だより及びPTA理事会等で、「早寝・早起き・朝ごはん」についてだけでなく、遅刻をしないよう啓発を行った。	A	【成果】保面室前の掲示物については、養護教諭のアイデアで、教職員や保護者も意見が書き加えられるように工夫されていた。大人の考えがあることに児童は関心を高めることができた。参画型の掲示は効果的だった。 【改善方策】今回の取組が継続、発展できるように環境を整える。
	主体的に行動する力を育む防災教育を推進する。手だて：「災害時連絡カード」の活用で保護者の意識を高める。災害時を想定した防災教育の実施と集団下校の訓練を行う。	土曜日授業の際、自然災害を想定した集団下校を実施。保護者の児童受け取りの方法、残った児童の集団下校と教師引率等について、具体的に訓練を実施した。それだけでなく計画的に5回の避難訓練を実施した。	A	【成果】土曜日授業の際の保護者の児童受け取りは、児童、保護者、学校の3者にとって有意義だった。受け取りの保護者はかなりいたが、整然と並んで子どもを待つことができた。 【改善方策】平常時における訓練だから冷静だったのかもしれない。訓練のように落ち着くことが大切だと啓発していく。
	「子どもの命を守る」視点で、食物アレルギー給食等にきめ細やかに対応する。手だて：給食調理室との連携。職員研修の実施	養護教諭が窓口となり、保護者への連絡や給食調理室との連携を行っているが、管理職及び担任だけでなく、いつでも誰でも該当児童のいる学級に補欠に入ることができる体制づくりを行った。エピペンについても研修を。シュミレーションしたり連絡先を確認したりした。	A	【成果】全員で「子どもの命を守る」という意識の醸成と、エピペン使用の実際について学んだことは価値があった。 【改善方策】一度したから、ではなく、毎年度定期的に職員研修を行う必要がある。

※評価(例) A…目標を十分に達成できた B…目標をほぼ達成できた C…あと少しで目標が達成できた D…目標達成までいかなかった